

説教 『転換と自由』 山本 護牧師
聖書 エレミヤ書 1:4~9 / 使徒言行録 16:25~31

エレミヤは預言者としての召命を受けたが(エレミヤ 1:5)、神に対してこう答えた。「ああ、わが主なる神よ、わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから(1:6)」。キリスト者の多くが、エレミヤの場に立たされたら同じように答えるだろう。「若者」とは、未熟さや力不足、不向きや情熱の乏しさといった条件に置き換えられよう。だがそれらは世の能力基準や自己評定に過ぎない。それを主の召命よりも優先させるのか。優先すべきは御言葉だ。「若者にすぎないと言ってはならない。わたしがあなたを、だれのところへ遣わそうとも、行って、わたしが命じることをすべて語れ(1:7)」。

「若者にすぎませんから」という態度は謙遜なのか。であればなおさら優先すべきは神の召命。それとも「彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて、必ず救い出す(1:8)」と語られた言葉を、話半分に聞いているのだろうか。「彼ら(キリスト者を含めて)」を恐れ、謙遜の構えに隠れてはならない。いつどこであっても、神は共におられ、どんなに閉塞した状況でも押し広げて下さるのだから。

パウロとシラスは宗教商売を妨害したとして(使徒 16:19)、激しく鞭打たれて入獄させられる(16:23)。拷問を受けた囚人たちの呻き声こぼれる牢。その最奥で(16:24)「真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていた(16:25a)」。静かで厳かな空気。「ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた(16:25b)」。囚人たちのすさんだ心が、彼らの賛美と祈りと共鳴し、牢獄全体が恵みに満たされた。

威嚇と圧迫、悲痛と絶望の淵である牢獄が、静かな恵みの場へと転換していく様子が想像できるだろう。加えて恵みの転換は、権力を盾に威張りくさった粗暴な看守にも起こる。地震で牢が壊れ、囚人脱走の責任を負って死のうとした看守に(16:26~27)、パウロは大声で命じた。「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる(16:28)」と。するとどうだろう。荒くれ看守は震えながらひれ伏し(16:29)、「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか(16:30)」と鬼瓦の顔を涙でグスグズにして尋ねる。

日本の刑務所では囚人(受刑者)が看守(刑務官)を「先生」と呼ぶ。その先生がなんと、囚人を「先生方」と呼んで教えを乞うた。恵みの出来事を軸にして「先生」が入れ替わった。神の御手は、時には大地震という自然現象をも用い(16:26)、人間の関係や生き方に大きな転換をもたらす。パウロらは看守の問いに答えて言う。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われる(16:31)」。

「主イエスを信じる」とは何か。これはパウロにとっても驚くべき転換であった。パウロは別の獄中から書いている。「わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに今では他の一切を損失とみている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、それらを塵あくと見なしている(コリント 3:8)」。「信じる」とは、世の支配の延長である自力や執着から解き放たれる、自由への恵み。

「わたしが命じることをすべて語れ(エレミヤ 1:7)」。私たちは何を語るのか、何を命じられているのか。転換を願い、主イエスを信じ、解き放たれている姿で生きること。それが自ずと福音の証しになる。「主は手を伸ばして、わたしの口に触れ(1:9)」、身に触れ、この小さな器を主の言葉として用いる。



【おまけのひとこと】

私の何が 私のどこで 主を信じるのか 考える頭か 感情の胸か 奥底にある腸わたにおいてか
主の手が口に触れれば言葉となる 腕に触れれば働きとなる 私の身体全体が主の御言葉になる